

令和2年度平和祈念集会 校長の言葉

今日は、令和2年8月9日、今年で原爆投下から75年目を迎えました。

原爆で亡くなられた方に対しご冥福を、また現在も被爆が原因で苦しめられている方に心よりお見舞いを申し上げたいと思います。

今日は、「長崎に生まれ育った皆さんにお願いしたいこと」をお話します。

私は昭和35年生まれで、原爆投下から15年後に生まれたので皆さんと同じように原爆の被害については直接知りません。しかし、私の世代は親や先生方が被爆者だったり、戦争経験者だったりしたので授業や身近なところで直接体験を聞くことができました。このように子どもに戦争体験・被爆体験を伝えることで平和な社会をつくらなければ、という願いが長崎では強く、当時から平和学習が行われていました。

今日、講話をしていただく予定だった、長崎大学4年生の 坂本 薫 さんも、私より随分若いので、実際に戦争の体験はありませんが、現在、青少年ピースボランティアとして、県内外の小中高校生と交流し、被爆の実相を伝える活動をしています。

坂本さんが、平和活動を始めたきっかけは、大学で被爆体験の手記を読む授業を受けた時に、県外出身者の人たちが真面目に受けず、私語が目立っていたことにショックを受けたことだそうです。

長崎県では、「8月6日、8月9日は何の日」と聞かれて、答えきれない中学生はいないでしょうが、しかし、よその県にはたくさんいるそうです。それからすると長崎の子どもたちは平和についての知識の深さは日本でも指折りです。

これからは「後世にどう伝承していくか」「平和教育をどう進めていくか」が私たち長崎県で生まれ育ったの者としての課題だと思います。

日本は戦後75年、戦争に直接参加せず、平和でした。しかし、世界情勢はどんどん変化しています。

この国の平和がこれからも絶対に続くとは誰も言い切れません。また、国の平和を続けるためには、国民一人一人が自分には何ができるか、何をするか、考えて行動することが必要になってきます。その点では長崎県の子どもたちは国の平和について行動できる人がよその県よりは多いはずだと私は思っています。

長崎の高校生には、高校生平和大使や高校生一万人署名活動に参加している人もいます。そのスローガンは「自分たちの力は微力だけれど無力じゃない」です。彼らの活動も、平和への行動のひとつであると思います。

皆さんはまだ中学生なので大きな活動はできないでしょう。だから、今はまず知ること、考えることから始めてほしいと思います。そして、将来、平和のために、自分ができることを行動する大人に育ってほしいと思っています。

その時に国の平和という視点と、自分の身近な平和という二つの視点をもってください。国の平和のためにどのように行動し、身近な平和のためにどのように行動するか、皆さんの今後の課題であると思います。

令和2年8月9日(日)

高田中学校長 今井正志